

法然における五念門についての一考察

杉 浦 道 雄

はじめに

五念門は、天親の『無量寿経優婆提捨願生偈』（以下『浄土論』）に、起行として説かれる。『浄土論』は偈頌と長行により構成され、偈頌は一心願生について明かし、長行は五念五果を明かすものである。五念門について、一者礼拝門、二者讃嘆門、三者作願門、四者觀察門、五者回向門と明かす。

法然は『選択本願念仏集』（以下『選択集』）において、「三經一論」として『浄土論』を正明往生浄土教として示すが、『選択集』において『浄土論』についての釈は見られない。五念門については『無量寿経釈』（以下『大経釈』）で異類の助業について五念門をもって明かすが、『浄土論』に依るのではなく、源信の『往生要集』（以下『要集』）に依って明かす。法然は往生行について五正行をもって明かすが、五念門については『要集』註釈書以外に殆どみられない。

本稿において、法然における五念門と五正行の位置、特に

念仏と諸行に焦点を絞り考察を試みることにより、法然における選択思想の展開の一端を窺うこととする。

一 五念門の構成

前に述べたように、五念門は『浄土論』に明かされる起行である。法然は五念門について『要集』による為、『浄土論』と『要集』の五念門の構成について比較する。

『浄土論』において称名は五念門の中、讃嘆門に明かす。『要集』は觀察門の中、色相觀について別相觀・惣相觀・雑略觀の三に分ける。その中、雑略觀について極略觀が明かされ

行住坐臥、語默作作、常以_二此念_一在於胸中、如_二飢念_レ食、如_二渴追_レ水。或低_レ頭_レ拳_レ手、或拳_レ声_レ称_レ名、外儀雖_レ異、心念常存。念念相續、寤寐莫_レ忘。¹⁾

と称名について明かす。『要集』は觀察門において、劣機の称名を許すものであり、『浄土論』と異なるものである。

法然における五念門についての一考察（杉浦）

二 五念五正についての深励・神興の見解

五念門と五正行との関係について、先学の論を窺う。深励の『論註講述』と神興の『論註講判』、特に念仏と諸行の関係を中心に比較する。共に『往生論註』の講述ではあるが七祖相伝の念仏に基づいた論である為、取り上げる事とする。

深励は「五念に五正行と同じく助正あり」と指摘する。即ち、五正行については往生行を説くものであるから一心を含め、五正行一一に一心読誦・一心観察という。これに対し五念門は一心を別に説き、往生行としての立場を表に出さず一報謝行である為、助正の分別は無いとする。しかし、五正行と同様に五念門を往生行とすれば、助正に分かれると述べるものである。

神興は五念門と五正行に六異一同⁽²⁾を立てる。六異中、分際⁽²⁾の異において五念門は如来回向の名号が三業へ発動することを開く為に助正について言わず、これに対し、五正行は往生の因行を明かすものであるから正助があり廃立を立てるものと指摘している。

深励と神興について検討すれば、共に基本的立場は共有している。しかし、深励は『入出二門偈』の「撰取選択本願故」の指南により、五念門を往生行とする時、助正に分かれるとする。両氏指摘のように、五正行に助正はあるが、五念門に

ついてはないと考えるべきであろう。

三 法然の『往生要集』観

法然は源信の『要集』に依り、五念門を釈す。まず、法然の『要集』の註釈書について考察する。法然は『往生要集註要』（以下『詮要』）『往生要集料簡』（以下『料簡』）『往生要集略料簡』（以下『略料簡』）『往生要集釈』（以下『要集釈』）の四部の註釈を明かす。四部の成立時期については多くの検証がなされている。⁽³⁾『詮要』と『要集釈』について比較し検討する。注意すべきは、次の三点である。

①『詮要』にない広・略・要が『要集釈』にある点
②勝劣難易について、『詮要』の観想念仏は勝・難であり、称名念仏は劣・易とする点であり、法然の当時の選択思想が『往生要集』下に依ったものであることを示している。

③念仏と諸行との比較において、『詮要』は「観念は修し難く、称念は行じ易し」と明かすのに対し、『要集釈』・『料簡』は「諸行は修し難く、念仏は修し易し」と明かす。『詮要』における観念と称念の対比は、五念門中の観察門に説かれる観念と称念の比較である。これに対し『要集釈』における諸行と念仏の対比は、観察門の中での対比ではなく、称念即ち念仏という選択思想が確立した上での念仏と諸行の対比である。

以上の三点から成立時期は、『詮要』が最も古く、『要集釈』

が後期のものであると考える⁽⁴⁾。

『要集』において五念門は十大門の中、第四正修念仏門において明かされる。第四正修念仏門は、『要集』の中核である。即ち十大門の中、往生の行体を説くものは第四から第八の五門であり、第五助念方法門が第四正修念仏門の助業であるとの構成からも、その位置は明確である。第四正修念仏門は、天親の『浄土論』を引き五念門により組織される。法然が『料簡』で「念仏はこれ観察門の異名なり」と言われるように、念仏は第四観察門にて明かされる。

このように、法然の『要集』観は称名念仏を中心としながら、総結要行に明かされる念仏以外他六法、即ち大菩提心・護三業・深信・至誠・常・随願が助成するという助念仏をもって明かされるものである。この中、七法の要は念仏と領解された思想背景について考察を進める。

四 法然における五念門観

法然は『大経釈』において、念仏について五念門をもって示す。『大経釈』において念仏と諸行が但念仏・助念仏・諸行往生の三義をもって明かされるが、その中助念仏に明かされる二種の助業、同類・異類の助業⁽⁵⁾において五念門と五正行が引かれる。同類の助業は『観経疏』に依り、五正行中の称名念仏（正定業）と読誦・観察・礼拝・讚歎供養（助業）をもつ

て正助二業の関係を明かす。異類の助業について冒頭「これ『往生要集』の意なり」といい、正助二業共に『往生要集』に依って明かす。即ち、『大経釈』において正行は第四正修念仏門に明かされる五念門の中観察門をもって念仏とし、助業について第五助念方法門であるとする。

異類の助業については『選択集』にも明かされるが、『大経釈』と小異がある。まず『選択集』では異類の助業の正行について「一向専念無量寿仏」とし、助業は上輩について「捨家棄欲而作沙門発菩提心等」、中輩について「起立塔像懸絵燃灯散華焼香等諸行」、下輩について「発心」と明かす。さらに『大経釈』において異類の助正全体を『要集』の意とするのに対し、『選択集』では助業の中輩のみに「『往生要集』にみえたり」という。

『大経釈』で五念門を正行とし、『選択集』では「一向専念無量寿仏」を正行とする意について、「助念」から「助正」への展開が背景として考えられる。即ち、『大経釈』では但念仏・助念仏・諸行往生との三義をもって明かされるが、『選択集』では廃立・助正・傍正と展開しているのは周知の通りである。助業を明かす「助念」が「助正」との展開の背景には、『大経釈』では五念門をもって正行としていたが、『選択集』においては同類の助業と同様、「一向専念無量寿仏」という正定業としての念仏が正行として挙げられる事がある。

法然における五念門についての一考察（杉 浦）

「助念」は念仏を助成する意であり、「助正」は念仏の正業を助成する意である。即ち、『大経釈』における五念門中の観察門としての念仏は、万機に通ずる往生の業因としての念仏として確立するに至らなかった。『選択集』において正定の業としての念仏が確立するに至ったのである。『大経釈』で正助共に示された『要集』の意が、『選択集』においては中輩のみで語られるに留まっていることから明らかである。

結論

これまで法然における正助二業の中正行即ち念仏について、五念門と五正行における位置について考察を試みた。法然は三経一論とするが、『浄土論』と『要集』の五念門は意義が異なる。『浄土論』においては、根本は法蔵所修の五念であり、如来の真实功德の名号に収められるものである。即ち一心五念である。しかし『要集』において五念門は高遠難修の行であり、観察門に明かされる念仏も劣機往生の念仏として適切ではない。この『要集』が称名念仏を説く書であると決定づけた法然は、五念門中観察門に明かされる念仏について善導に依りさらに正定業と助業という関係性の中において、普遍性・絶対性をもった決定往生の行業として確立した。法然が源信に依りながら専修念仏の決定的意味を求め、善導

教学へと移行したことを示すものである。

- 1 『真宗聖教全書』一八〇九頁
- 2 六異「建立・分際・機法・真仮・立名・開合の異」
- 3 坪井俊映氏などは、『詮要』は『要集釈』の再説、石田充之氏などは『要集釈』は後期の著、赤松俊秀氏は『要集釈』は『選択集』の後の著、末木文美士氏などは『詮要』が最も古く『料簡』『略料簡』最後に『要集釈』とする。
- 4 『料簡』と『略料簡』については『詮要』の後と考えるが、『要集釈』との前後関係については結論に至らない為、時期についての記載は避けた。
- 5 法然は「同類の助成」「異類の助成」というがその内実は助業である為、同類・異類の助業とする。

〈キーワード〉 法然、五念門、助業

（同朋大学大学院）